

## (十二) 法華寺立正婦人会

法華寺立正婦人会は明治維新以前から伝わる法華和讃を伝承している。明治時代に篤信婦人村田いま子（大黒屋）女史が従来の音律に常磐津・清元等の音律を加え現在の莊重な曲に完成した。太鼓を打ち宗祖、開祖の御詠を歌頌し終りに玄題二唱するのを一連とする。明治四十三年春に頭本法華讃歌集として出版された。戦前は仙台のNHKでも収録され放送された。宗祖第七百遠忌の折には全国の法華和讃を集めて二冊の本を発行したが、この中に法華寺の和讃も収集され、採譜もされたので楽器を能くする方は演奏してみると身近に和讃の良さを感じられることと思う。

宗祖、開祖、深草の元政上人等の和歌は百數十首を伝えられている。

立正婦人会は法華寺の年間行事の中の三大法要に出席して法要の前と後に和讃を奉唱する。近年では宗祖第七百遠忌、住職交替式、庫裡落慶式、位牌堂鐘楼堂落慶式、門祖第六百遠忌、以信院本堂落慶式、実成寺入寺式等出番が多く、その都度法要に莊重な音律を醸していただいた。

婦人会の伝承は和讃だけではなく、年中三大行事の法要後に出てくる飯台いわゆる齋の味にも及んでいる。江戸時代にお手伝いをいただいていたれば、遠野藩主南部弥六郎殿も長芋のふくし立雑煮をこの上もないご馳走と喜ばれたであろう。飯台は前日からの仕込みに始まり、当日は朝早くからの湯沸かしから始まる。薪と炭の時代は洗い物も大変な作業で特にお会式は十一月の小雪まじりの季節で成り物は沢山供えられるが燭台を磨く手も真鍮に吸い付いてしまったり、桜の造花を造る手も火鉢にかざしてという大変な時代を経てきている。食する側の方々はこの様なものと思われなくて苦労した過程を味わっていただきたい。昔ながらの味で楽しみにお詣りされる方も多いのです。世のご婦人方は外食が贅澤たのしみと思われるかも知れませんが料理を作る過程、その準備する心掛けがご馳走たのしみという字になって今日に伝わっています。お手伝いの方々を募っています。（少々脱線）

法華寺立正婦人会はこの外に本堂裏手の阿庭大明神を祀る阿庭講をお祭りしている。縁日は毎月の

二十二日で熱心な方々の参詣をいただいている。婦人会の代表者は次の三氏である。

長谷川 サワ

中村 千代

根市 たか子

祖師像の綿帽子の由来

文永元年（一二六四）八月、久しぶりに故郷房州に戻り母を見舞った日蓮上人は、十一月には工藤吉隆のもとに招かれました。その途中、小松原で地頭の東条景信らの手勢に襲われました。熱心な念仏信者であった景信は、師の道善坊にそむいてまで熱心に法華経を説く日蓮聖人に対して深い敵意を抱いていたのです。一行は必死に防戦しましたが、お弟子の鏡忍坊、工藤吉隆らは討ち死にし、聖人ご自身も景信に切りつけられ、額に三寸ほどの疵を受けてしまわれました。そして奇蹟的に鬼子母神のお加護で救われた日蓮聖人は、間道づたいに夜道を逃れ、小湊山の近くにたどりつかれました。やがて、谷間の水で疵を洗い、経を誦みながら、身をかくした岩窟の砂を疵口にぬって血をとめたということです。その翌朝、額に深い疵を負って岩窟に隠れている聖人の姿を見かけた「おいち」という老婆が、とっさに自らかぶっていた綿を聖人にさしあげたということです。

これが綿帽子の由来ですが、寒くなると痛んだであろう聖人を偲んで、秋のお会式から春に行われる千部会、あるいは四月八日の釈尊降誕の聖日まで聖人のお像に綿帽子をかぶせるようになりました。

## 鬼子母神と十羅刹女

鬼子母神は、古代インド神話に出てくる羅刹（鬼）女で、その名をハーリテイといふ、自分の子供だけを愛し、他人の子を食していたが、仏の教化を受けて、自らの過ちに気づいてその罪を悔い、人々の子供を護ろうと決心した説話は、よく知られているところです。この誓いにもとづき、やさしく子を抱き天女の形をした鬼子母神は、安産と子育ての守護神として信仰されるようになりました。日蓮聖人も、鬼子母神と十羅刹女を法華経の守護神として大曼荼羅に勧請され、鬼子母神は十羅刹女の母であると説かれています。

さらに法華経の第二十六章陀羅尼品に、鬼子母神は十人の羅刹女と共に、法華経の行者・信者を守護するという誓いが説かれていることから、日蓮宗では鬼子母神の信仰が広く行われています。江戸時代に入ると、天女形に加えて鬼形の鬼子母神が造られ、日蓮宗の祈禱本尊と定められました。これは行者に危害を加えようとする者に対し畏怖の念を起こさせ、行者を守護しようとするというものです。そして日蓮宗では、鬼形は破邪調伏、天女像は安産子育てと分けて説いています。